

「ころぶ」演技

小田幸子

古型村に「ころぶ」という語が散見する。現代では、つまり転倒する場合によく用いるが、「ころがる、回転する」というのが、原義のようだ。狂言〈瓜盗人〉では、「さらば、ころびを打って参ろう」と、舞台上をころりころりと横転しながら瓜を探る演技があるが、能ではどうだったのだろう。「ころぶ」と記述する場合、横転・前転・後転などの回転技が行われていたのだろうか。

「台ノ上ヨリコロビヲツル。上面、首ヲナシテコロブ。ウツブキニナリテ台ノ下ニイル」
 『妙佐本仕舞付』(錦戸) 切腹して転落する
 や「ダイノ下ヘコロビヲツル」(同右(咸陽宮))
 二人の刺客が居眠りして転落するなどは、背中をまるめて台から落ちながら、床で一回転するといふ演技が想定される。後者には「しん(ぶ)やうはうしろへころび、だいよりおつる。けいかハ右之方へころび落也」(能楽研究所蔵ワキ伝書『能之秘書』)という記事もある。一人は後転、一人は右に横転するのだろうか。

台上からの転落例は(紅葉狩)にもみえ、『引おろし』と、左へころびたるがよし』(中

村正辰仕舞付』、『引おろし』と云時引をろされて、かつばとまろびてゐる」(『宗節仕舞付』)などと記す。また、『中村正辰仕舞付』の別の箇所では、「わき、『引きおろし』と、引おろし様に仕手のゑりを取、右のひぎに引のせ、右へたおす。右へ横にたおれる」と詳しく記述する。本当にワキが引きずり倒すようだが、この場合一回転するのは困難だろう。右で注目されるのは、「転ぶ」と「倒れる」を、ほぼ同義で用いている点である。『宗節仕舞付』の「かつばとまろびてゐる」も、「ぼつたりと倒れ伏し、しばらくその状態である」とも解せよう。一般語の「転ぶ」には「倒れる」の意味もある。

結論を先に言えば、型付の「ころぶ」は、特定の演技(型)を指すというよりも、一般語としての用法を色濃く残しているらしく、実際にはいろいろな転び方がおこなわれていたようである。右に掲げた例は回転しているかどうか必ずしも明確ではない。台から落ちる場合、体を丸めた回転が最も無理のない動作であることを考えると、その可能性も低くないといふところだろう。少なくとも、飛び

降りて膝をついたり、安座する程度のもではなく、転がったり、バツタリと床面に伏してしまうような演技を指すのではなからうか。だが、回転の可能性がある例は少なく、多くは「倒れる」と同義のようである。「倒れる」にもいろいろな倒れ方が予測されるが、以下では、「倒れる」の用例も参照しながら、「ころぶ」演技の具体相にせまっていきたい(参照資料は、『能楽資料集成』の『下間少進伝書集I・II・III』『金春安照型付集』『細川五部伝書』『観世流古型付集』所収の型付に限定した。書名は、適宜略称を用いた。)

右の資料中、類語の「まろぶ」も含めた「ころぶ」の用例は、先述のものも含めて15例を数え、『少進伝書』9例、『妙左本』4例、『正辰仕舞付』1例、『宗節仕舞付』1例、そのうち11例は、斬られる・祈り伏せられるほか、死に際しての演技である。

まず、「そりて正面へ首なヲシテ、あふのきにコロブ」(『少進能伝書』(殺生石))は、現在の「仏倒れ」(立ったまま後ろへ倒れる)と考えてよいだろう。「ころぶ」が仏倒れを指す用例はこれのみだが、「あおのき(け)にたおれる」(『正辰仕舞付』(是界・土蜘蛛))なども、仏倒れと解される。また、(是界)は「両の袖ひろげ、うつぶけにたおれふす」(『正辰仕舞付』)との説みえ、前方仏倒れともいふべき演技も伝えられている。

(殺生石・是界)とも現行では、ここで仏倒れは行わず、「飛び安座」や「一気安座」(用

語は岩波講座能・狂言『能楽図説』に従ったなど、両膝を組んで急激に下居する形である。床面に全身で倒れる派手な演技はいつのまに失われてしまったわけである。両曲ともこの後も演技が続くから、仏倒レをしてしまうと、立ち上がりにくいのだろう。

次に、現行の「安座」や「平座」の類（飛び安座・一気安座なども含める）に相当するらしい例をみていこう。実は、この例が最も多い。

○「カタ足ニテ、二三タ^マク〜トシテコロブ」

（『妙佐本』〔安達原〕）

○「右へタチ〜トマハリコロブ」

（『少進能伝書』〔葵上〕）

○「たち〜ト跡へシサリ、コロブ」

（『少進能伝書』〔鶏龍田〕）

イノリ物の右三例は、ワキに数珠で打たれなどして、祈り伏せられる場面で用いられ、いづれも、後方に「タチ〜」と下がって「コロブ」。現行の演技にごく近い印象である。〔安達原〕の場合、「タチ〜トシサリ、トウ Doyle」〔少進能伝書〕や「仕手柱のもとへしさり…下に…下に居る」〔正辰仕舞付〕とも表現されている。江戸初期には「安座」や「平座」の語はまだ使用されておらず、このように、「とうど居る」・「下に居る」などと記述することが多い。なお、「…左へ廻り、タチ〜トコロブ。コロビザマニ扇ヲ先へ出す也」〔少進能伝書〕〔実盛〕「風に縮める枯木の」も、ほぼ同じ演技を意味するのだろう。

以上は、鬼や武人の動作だが、女の例としては、

○（刀を）「ムネニツキ立、ヨロ〜ト」、コロブ」（『妙佐本』〔錦戸〕妻の自殺場面）

○チカラナキヤウニコロブヨシ

（『岷蓮江間日記』〔三井寺〕）

などがある。後者は「力なきやうにたおれふす」〔童舞抄〕とも記しており、ともに、いかにも女っぽい倒れ方をしているようだ。これらも、現行の演技にとても近い印象がある。

以上のように、「ころぶ」は、回転・仏倒レ・安座などをカバーする用語であることがわかる。単独で用いる以外に、「あおのけにころぶ」などの形で、転び方に説明を加えることもあり、「倒れる」や「とうど居る」・「下に居る」などとも関連する。

次に、気になる点に触れておく。「転ぶ」・「倒れる」には、体を横倒しにして崩れるという語感があり、足をあぐらに組んで座る現行の「安座」とは少々異なるのではないかとの疑問が残る。次に『少進能伝書』〔藤戸〕の用法をみよう。

○「人目もしらず伏マロビ」タチ〜トシサリ、トウドスル。「我子カヘサセ」ト、脇ヲミテ泣。又、脇ニトリツキ、「人めもシラズ」トユスリ、フシマロブ事もアリ。

我が子をかえしてくれとワキに迫る（藤戸）のこの箇所は、古くからさまざまな演技があった。本文も「伏しまるび」と、激しい悲しみを体で表現するよう要請している。右は、

二種類の方法を記述しているのだが、たじたじと後方にさがって安座する前者と、ワキを揺さぶり、「フシマロブ」後者とは、あきらかに開きがある。

同じ箇所を『正辰仕舞付』は『しらず』と左へたおれ、『ふしまるび』と右へたおれる。『わが子かへさせ』と、少おき上り、わき見て、『うつなき』と、又右へふしてなく」と記述する。「まるぶ」の本文に相応させた特例かもしれないが、左へ右へと体を倒し、最後に右横倒しになって泣く。また、『少進能伝書』〔海士〕では、『つるぎヲすてゝぞふしたりける』ト右の方へぬるやうにころぶ」と、あきらかに右横へ倒れ伏している。手も床に突くのだろう。

この動作は、とくに女の演技に多かったのかもしれない。『正辰仕舞付』〔班女〕の『又ひとりねになりぬるぞや』と、右の手にて左の袂を取、左の袖にてなき〜右へひぎをたをし、なきし〜手をはなしても、其まゝうつぶき居る」も、右横に倒れているらしい。「転ぶ」の語こそ用いていないものの、このような演技があったのだ。

より多くの作品で、女たちは右横に倒れ伏し、泣いていたのではあるまいか。

「転ぶ」・「倒れる」は、能の術語としては定着しなかった。演技の洗練化の過程で、そうした表現が次第になじまなくなったためかもしれない。

（能・狂言研究家）